

9月の園だより

令和7年9月1日

杉並区立西荻北子供園

園長 須田 なぎさ



伝統文化の息吹にふれて

園長 須田 なぎさ

酷暑が続いていますが、朝夕の風に少しずつ秋の気配が感じられるようになりました。夏季保育では、おひさまグループとほしグループが久しぶりの再会を喜び合い、笑顔があふれる時間となりました。ご家庭でも、夏ならではの体験を楽しまれたことでしょう。

2学期は、期間も長く、また様々な体験を通して子どもたちがぐんと成長する時期です。元気に、なかよく、よく考えて、充実した園生活になるように過ごしてまいります。

さて、この夏の間、職員は、様々な研修を受ける機会がありました。最近では、オンライン研修も増えてきていますが、私は全国から人が集う大きな研究大会に二つ参加し、日本の伝統文化である狂言と大津絵に触れる貴重な体験をいたしました。

NHKの子ども番組「にほんごであそぼ」にご出演されていた狂言師・野村萬斎氏が、登壇された際には、ただ舞台に立っておられるだけで、その存在感に圧倒されました。マイクなしでも、広いホールに低音で胸に響く素敵な声に感動し、美しい所作に心を奪われました。狂言は、室町時代ごろから続く日本の古典芸能で、人間の滑稽さと失敗をユーモラスに描く喜劇です。舞台には、大道具などはなく、型のある言葉と動きで感情を表すものだそうです。お稽古の様子を動画で拝見し、師匠の姿を真似て、繰り返し体を動かすことで、型を身につけるという学びの姿勢に、「学ぶ＝真似ぶ」の語源の意味を深く感じました。

また、別の研究会では、大津絵師・五代目高橋松山氏による講演と実技の研修に参加しました。大津絵は、江戸時代に滋賀県・大津の宿場町で旅人向けに売られていた庶民のための絵です。ユーモラスで親しみやすい絵柄が特徴で、鬼や動物、仏さまなどを描いた風刺画やお守りのような絵として人気があったようです。高橋松山氏の筆さばきからは、一筆ごとに絵に命を吹き込むような躍動感がありました。大津絵も、描き方には順序や型があり、松山氏の手ほどきを受けながら、実際にかいてみましたが、同じようにはできません。それでも「それでいいのです」と教えていただき、自分の思うままにかくことができました。受講者の作品は十人十色で、それぞれ個性が光っていました。(大津絵について：[大津絵の店](#)で検索してみてください)

狂言と大津絵はどちらも、長い年月を経て受け継がれてきた日本の表現文化です。その文化を受け継ぎ、次の世代へつないでいこうとする偉大なお二人の言葉と姿から、「表現は真似から始まり、自分でやってみて、感じ、そして表現していくことが大切なのだ」と学びました。そして、子どもたちの自由な表現を受け止める大切さを、改めて実感しました。

2学期も、子どもたちと一緒に心と体を動かして感じ、子どもたちが自由に「表現する力」を支える環境づくりに努めてまいります。これからも、園とご家庭がともに歩みながら、子どもたちの豊かな育ちを見守っていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

